

地理学と歴史学

——青野教授の質問に答えて——

酒 井 三 郎

は し が き

1973年2月28日、本学人文研の研究発表会において、青野教授は「地誌学と系統地理学」と題して講演を行い、地理学の分類表⁽¹⁾を示されて分類学ないし研究対象について教授の該博な知識を披露された。この時青野教授は地理学の隣接諸学に対して研究対象の妥当いかんを質問され、とりわけ歴史学については、いかに地理学と異なるかという問題提起をされた。これらに対し多少の質問があり、後者についてはわが歴史学にあっては、史学科諸先輩より種々の発言がなされた。

わたしは発表会に遅参して、その全貌を拝聴する機会を失したが、わたしの拝聴した範囲においても極めて有益な講演であり、得るところが少なくなかった。講演の全貌をうかがい得なかったので、その席で敢て発言をしなかったが、本学の「史学概論」講義の担当者として一言なき能わずと考へ、青野教授の質問に答える意味において、「地理学と歴史学の差異」を主として、わが諸先輩の発言と多少重複をも顧みず答へることとする。

もとより浅学非才であり、また極めて1部分についての発言である故に、青野教授はじめ諸賢のご叱正を得るならば幸甚これに過ぎるものはない。とりわけ地理学については、歴史学と関連するところのみふれるつもりであるが、盲

(2)

目蛇の言少なしとしないことと思うので忌憚ないご批判を乞う次第である。

1

地理という言葉はいうまでもなく中国から伝った言葉であり、山崎教授の発言されたごとく、歴史に属するものであった。例えば『随書』の「経籍志」の史部817部のなかには、正史・古史・雑史・霸史・起居注・旧事・職官・儀注・刑法・雑伝・地理・譜系・簿録の別がある。中国が「六経皆史なり」という国柄で、こうした思考方法からすれば、歴史の中にはいることは当然である。

ヨーロッパ風の *Geographie* の語源はギリシア語の *geōgraphia* である。そしてその意は *earth description* である。

これに対し歴史という言葉は、地理と同じく中国からの語であるが、その意味は経過を記録することである。

ヨーロッパからきた歴史の語源には2系統があり、1はドイツ語の *Geschichte* であり、それは *geschehen* すなはち「生起する」から生じた「起った事柄」を意味し、他は *histoy* でギリシア語からでたもので「探究して獲られた知識」を意味するものとされる⁽⁸⁾。

しかしわれわれは、こうした言葉の意味に捉らわれることなく、現在おこなわれている地理学と歴史学とのかかわりを見ればよろしい訳であるが、その言葉の本来の意味が那邊にあったかを知っておくことは必要であろう。

2

頼山陽が『日本外史』を書いたとき、その巻三「源氏正記」に⁽⁴⁾

外史氏曰。余嘗踰函嶺。望八州之野。北控奥羽。知源氏基業深且遠矣。とある。函嶺（箱根山）にたつて、関東八州の原野のみならず、奥羽をヒンターにしているのが望見できるか、どうかは、彼一流の文章の文として問題にしないとしても、この地理的表現は、巻三の他のもの、例えば「時平氏在南海。

屢侵山陽」とか「而兼光方破行家。追之紀伊。聞難還京師」といった場合と異なるものがある。後者の地名は、事件を述べる必然的關係にあるものであるが、前者は山陽が史論を述べるところであって、事件と必然の關係にあるのではない。のみならず前後の句の論理的飛躍がある。その飛躍は後続の文章によつて明らかとなるのであるが、要するに源氏の由来と東国とのかかわりを主張したもので、歴史的叙述の中に、地理的叙述が入りこんだものである。

しかしながらこうした叙述はもっと明らかに、ヨーロッパの場合においてうかがわれる。Herodotus がその『歴史』を書いたとき、Croesus が Cappadocia に兵を進める叙述の中に、Cappadocia の地理が述べられている⁽⁵⁾。同じようなことは Julius Caesar が Commentarii de Bello Gallico⁽⁶⁾ の第1巻にも見られる。

これに反して地理的叙述の中に歴史的のものが見られるのは Cornelii Taciti の De Germania Liber⁽⁶⁾ である。いうまでもなく Germania は紀元69—99年の間ゲルマニア民族の住まう土地・風俗・習慣からその諸部族に及んでいる。その筆者が著名な歴史叙述家であることはひとのよく知るところである。

以上のことは、歴史を書く時に地理的記述が必要であり、地理的叙述なしにある地域の歴史的事件を述べることができなかつたことを意味する。地理が歴史をふくんでいるというか、あるいは歴史が地理をふくんでいるか、ともかく地理的叙述と歴史的叙述とが不可分の關係にあった。

このことはヨーロッパにおいては、中世から近代に及んでも見られる。例えば Marco Polo の Gipangu の記事は、日本の地理を書いているともいえれば、その歴史を書いているともいえる。Jean Bodin (1530—1596) はその Methodus ad facilem historiarum cognitionem (Paris, 1566) で環境論を述べている。そして彼の影響を受けた de Montesquieu (Charles de Secondat, Baron de la Brède et de Montesquieu) (1689—1755) は著名な

(4)

Esprit des Lois を書いた時に第14篇で「法と気候の性質の関係」を述べ、続く3篇で市民的奴隷制、家内的奴隷制および政治的奴隷制と気候の性質との関係を論じている。⁽⁸⁾ Montesquieu のような多方面の文人を歴史家として枠にはめることには問題があるが、われわれは啓蒙期の作家 Voltaire, Rousseau などとともに学問未分化の時代における歴史家として Montesquieu を位置づける。⁽⁹⁾ たしかに彼の *Considérations sur les causes de la Grandeur des Romains et de leur Décadence* (ローマ人盛衰原因考) のごときはまさに歴史書である。かかる彼の歴史論のなかに地人相関を論じ、⁽¹⁰⁾ 環境決定論をなしたことは、後のアメリカの地理学者 E. Huntington (1876—1947) を想起させるものがある。Alexander von Humboldt (1769—1859) よりやや先輩になる Johann Gottfried Herder (1744—1803) が *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* を書いた時 (1784—91), 地球の生成からその自然地理的形勢を述べ、人類の生活に及び人類の制度・教育・道徳を述べたことは、「地理」と呼ばれるべきものを豊富にもつていたことの極めて明確な証拠である。⁽¹¹⁾ Alexander von Humboldt さえも、その兄 Karl Wilhelm (1767—1835) のごとく歴史学的ではなかったにせよ、探検者として自然科学者としての一面、歴史的意識なしには *Essai politique sur l'isle de Cuba* の作は生れなかったであろう。

わたしはいわずもがなの近代までの、歴史と地理とのかかわりあい、ながながと述べすぎた。簡単に Johann Gustav Droysen がいうように人間の才能が外的世界を把握する場合には *Raum* (空間) と *Zeit* (時間) によるほかならうからというべきであった。⁽¹²⁾

3

以上見てきたように学問としての発展過程において、地理学と歴史学とは双生児であった。しかしながらこのことは、歴史学にとつては多かれ少かれ他の

学問との関係においても見出される。地理学は前記 Humboldt や同時代人の Karl Ritter (1779—1859) から Jean Jacques Élisée Reclus (1830—1905), Friedrich Ratzel (1844—1904), Albrecht Penck (1858—1945), Ferdinand von Richthofen (1833—1905), Sven A. Hedin (1865—1952) らをはじめとして多士済々たる碩学の輩出によってその学が進められた。

その間、歴史学にあっても地理における Humboldt にあたる Barthold Geoge Niebuhr (1776—1831) が destruktiver Kritiker として新しい史風を興し、Leopold von Ranke (1795—1885), Karl Heinrich Marx (1818—1883) および Marxist の Epigonen⁽¹³⁾, Karl Lamprecht (1856—1915), Eduard Meyer (1855—1930), Benedetto Croce (1866—1952), Friedrich Meinecke (1862—1954) 等々によって最近の史学に積み重ねてきた。

いうまでもなくそれぞれの学問は孤立的でなく、地理学と歴史学は相互に影響し、また哲学や社会学などとも関連して変貌してゆく。われわれはそうした 1 例を Karl Haushofer の Geopolitik⁽¹⁴⁾ に見ることができる。

4

かつては双生児であった地理学と歴史学が、そして極めて最近まで表裏の関係であった 2 つが、全く異ったような学問として成りたつにいたったのはどうしたことであろうか。

19世紀の半ば以後、それぞれの学問はその独立とその科学性を主張して、自らの学を権威づけようとした。そしてひとたび成立した学問は、専門化を誇って細分に細分を重ねた。かくして、いまや異なった専門分野は風馬牛も相及ばざる観を呈するにいたった。

現代地理学ないしは現代史学とは何かと聞かれた場合、われわれはそれに簡単明瞭な解答を与えることは困難であろう。少くとも歴史学を見ても、その中にいくつかの分派があり、それぞれ自派の正統性を主張してはいるが、歴史学

(6)

をおおう理論を建設しているとはいいい難いし、とりわけ歴史学にあっては理論は実証されなければならない。大塚史学のごとき優秀な理論もその具体的実証の面においてさまざまの批判を受けている。⁽¹⁵⁾ ということは歴史学はかくかくである⁽¹⁶⁾と端的にいえぬものをもっている。地理学にあってはその点いかがであろうか。

現段階における地理学は、科学分類からすれば自然科学と社会科学との両方に属するように思われる。すでに掲げた青野教授の分類における自然地理学は前者に属し、人文地理学は後者に属する。かかる2つの領域に属するということは、全体としての地理学が、純粋な単一科学でないことを示している。

このことは歴史学においても見られる。歴史学は社会科学と人文科学との両属である。いうまでもなくこの場合の社会科学とは、研究の対象からそういわれるのであって、人文地理学が社会科学であろうといわれているのと同じ意味においてである。はじめ Leopold von Ranke が学問としての歴史を考えたときに、彼は Niebuhr の方法をついで厳密な史料処理のもとに純粹客観的な研究によって *wie es eigentlich gewesen* (それは本来どうあったか) を示すことを目的とした。しかしながらかかるものが、科学としてじゅうぶんの地位を得るものではなかった。されば Eduard Meyer が *Zur Theorie und Methodik der Geschichte* において「歴史というのは体系的な学問ではない。歴史家の仕事というのは、いちど現実の世界に表れた事柄の経過を探究し、それを叙述することであって、いかなる特殊問題をとってみても、体系の千差万別の状態を脱し得ない⁽¹⁷⁾」とのべ、さらに「歴史法則の存在しない理由の根拠は、歴史研究家の知能の薄弱とか、観察材料の欠如によるものでなくて、むしろ歴史そのものの本質による⁽¹⁸⁾」⁽¹⁸⁾として歴史の科学性を否定せざるを得ないところまでたち到了。

しかしながら哲学研究の側から救援があった。すなわち西南ドイツ学派の Wilhelm Windelband の所説をつぐ Heinrich Rickert の人文科学の提唱で

ある。ここに経験科学において自然科学に対立し、方法論的に異なる科学として歴史を含むというよりも、歴史そのものといってよい人文科学が提起された。すなわち普遍妥当性を有する法則定立的な自然科学に対する価値関係的な個性記述的学問の存在であった。かくして歴史学は研究対象から見れば社会科学であり、方法論的に見れば人文科学であるという科学性を獲得した。

むろんこれに対して歴史学を自然科学と同じものとして法則定立を主張する学派のない訳ではない。Marxism はそれであって一元的立場にたって真理の唯一無二を主張し、*Die Geschichte aller, bisherigen ist die Geschichte von Klassenkämpfen*, といった法則といえないまでも類型的通則といったものを説く。わたしは科学的分類はよくわからないが、歴史学は現在段階において、個性認識の時期であって、未だ法則をうち建てる時期には到達していないものと考えている。むろん学問は日進月歩を重ねているし、歴史学が法則を定立する時期の来る日もあろう。しかしそうした時期、それは歴史学と呼ばれるべきか、どうか疑問に思うものである。

さて上記において人文地理学をわたしは研究対象から社会科学として位置させたが、あるいは前記歴史学の場合に述べたように、方法論的に西南ドイツ学派の主張するごとく、個性記述的性格をもつ故に人文地理学として自然地理学に対立させたものであるか、地理学者の説を聴かなければならない。しかしいずれにせよ方法論的に自然科学的である自然地理学を除外して、人文地理学を歴史学と比較し、その差異を明らかにすることはできる。まずわれわれは研究対象から見、ついで方法論的に窺うことにしたい。

5

人文地理学と歴史学とは、どちらも人間の社会生活を対象としているので、その研究対象の側からいえばほとんど相違はないように思われる。ただ強いて相違を求めるならば、前者は社会的生活の物的基礎に重点をおき（その場合そ

(8)

れを究極的に押し進めると自然的条件の自然地理的研究となる), 後者はそれをとりあげる人間の側に重きをおく(それを究極的に進めてゆけば, 人間の精神史的研究にまで到達する) ことである。さきに挙げた地人相関論のごときは両者の接触領域である。しかもその重点のおき場により, 素朴唯物論ともなり, また Herder の所説のようにもなる。気候の人間の衣食住への影響は少なからぬものがあるが, 現代にあっては, 人間生活に及ぼす力も絶対的ではなくなり, 文化の交流, 建築資材の多様化, 冷暖房設備の発展, 貯蔵方法の進歩等々で差異が少なくなりつつある。

次に両者の差異と見るべきものは, さきにふれた空間と時間の観点を働かせることである。地理学が前者の側から, 歴史学が後者の側からすることは, いまさらいうまでもない。前者は横断した, 静止的なものとして捉え, 後者は縦にというか, 動くものとして掴むのである。しかしこのことは, やがては方法論に連なるものであるが, 対象の選び方にも存在する。同じ人口の調査においても, 1971年ないし1972年の Roma の人口と Tenney Frank がやったように古代ローマ初期のそれとでは違った学問になってくる。⁽¹⁹⁾ 歴史学にあっては発展, 動揺, 推移, 変遷といった沿革が好んで採りあげられる。

しかしながら対象における現状の研究と過去の研究との限界(実地踏査によって見る現状と記録による外ない過去の状況との差異は容易に認められるにしても)はそれほど容易でないことを, われわれは次節においてふれるであろう。ともかく歴史学にあっては, 地理学のほとんど持たない対象に直面する。それは古文書・古記録である。地理学にあっては文献資料を扱わないののではないが, 歴史学にあっては, 現状を認識することができぬために, それに代るものとして, 往々いわゆる史料を利用する。これが歴史研究者を苦しめるものであることは, 知る人ぞ知るである。のみならず当該史料が真実に, たち向う対象を伝えるものであるか, どうかを調査する「史料批判」が必ず行われねばならない。統計のごときも統計学的に依拠することのできるものでなければなら

ないが、古い時代には逐年にそれを遺していないために困難を感じることが少なくないのである。

次に方法論にはいる。対象にたち向う姿勢は広い意味の方法論になるが、わたしはそれを対象のなかにふくめて見てきた。実際史料処理のごときは、歴史学の特別の仕事であるが、対象をあったままの状態に据えおく作業で、地理学の実地調査の諸準備にあたるものであろう。

さて対象論でふれてきたことに関連するが、地理学と歴史学の方法論的に差異のあるところは、地理学が「どうあるか」を狙うのに対して、歴史学は「なぜそうなったか」を狙うことである。すなわち変遷なり、推移なりのよって来るところを追求してゆくことである。いうところの意味は、地理学が現状を将来した理由にふれないというのではない。あらゆる学問がそれを棄てることはできないであろう。さりながら歴史学は原由追求をその本質的な使命としていることにある。

ここに最も大切な方法論上の差異は、歴史学は「歴史はわれわれがつくる」という主体性にかかわりをもつ科学であるということである。次節に述べるように地理学にもそれがなくてよろしいという訳ではないが、他の諸科学とともに地理学は、その学問が利用厚生に連なるといふ程の意味である。これに対し歴史学でいうところのものは、歴史学はわれわれの祖先——直接の個々の祖先のみならず、広く人類の祖先を含めて——がつくった足跡の研究であり、それを出発点としてわれわれがその後をつくるものである。かくして歴史学は過去の歴史に対して厳密に批判的であると同時に、同感を欠くことができない。往々にしてそのバランスを欠くために過去が罪されたり、また懐古趣味に墮したりする。われわれは将来の歴史をわれわれがつくるものだとの意思を強くもたなければならない。そのために過去が生かされねばならない。その意味は過去を自らに好都合に理解することではなく、あくまでも客観的に厳正に批判し、そのうえに自らを出発させることである。われわれの現在は、過去と将来との

(10)

接点である。

6

わたしは前節において地理学の対象が人類の社会生活の現状の研究であり、歴史学がその過去の状態の研究であると述べた。そしてその限界をどこにおくかということになると容易ならざることを指摘しておいた。わたしは率直に言えば、過去と未来とはあるけれども、現在は事実存在しないとの考えをもっている。かかる発想については、すでに本誌第35号に述べておいた。⁽²⁰⁾ 現在というものは一瞬的なもので、一瞬にして過去に入ってゆくものである。しからば、いつまでが現在であって、いつからが過去になるか。地理学的研究の対象とされる現状とは果して何であるか、歴史学的研究の対象とされる過去の状態とは如何。

最近の若い人たちの間には現代史の興味が旺盛である。⁽²¹⁾ ヴェトナムの紛争・ニクソン政権の問題・アジア＝アフリカの諸問題・パレスチナの問題等々を対象として研究しようとする。われわれはスペインの内乱、ポーランドのゴムルカ政権、チェコの「戦車と自由」などの諸問題⁽²²⁾については、史料が揃わないことはもとより、整理されてもおらぬながらも、なおこれに応ずることは、できないことはない。しかしながらアメリカ軍撤退後のヴェトナム問題はまだ継続中であって、未解決の問題は山積しているし、ニクソンの対黒人政策は表に出てくるのが少ない。スーダンの問題・アラブ＝ゲリラの近東の問題は毎日のように動いている。かかる諸問題に対してどこまでが過去で、どこまでが現状なのか、そこに限界を設けることは便宜的以外の何ものでもない。歴史的過程の連続⁽²³⁾のなかで、過去・現在の分界線を設けることはできない。かくして地理学が現状を扱い、歴史学が過去の状態を扱うという、対象による地理学と歴史学の差異は本質的なものだといえない。

次に主体性の問題にしても、歴史がわれわれの歩みであるかぎり、歴史学に

は直接的であるが、地理学にとっても他の諸学とともに人間の社会生活にかかわりをもつものであるから、その学問が人生の目標に無関心ではあり得ないことはいままでもない。

かく考えてくると人文地理学と歴史学とは結局同じものを同じように研究するものであるというほかはなく、その差異は50歩100歩のものであると思う。

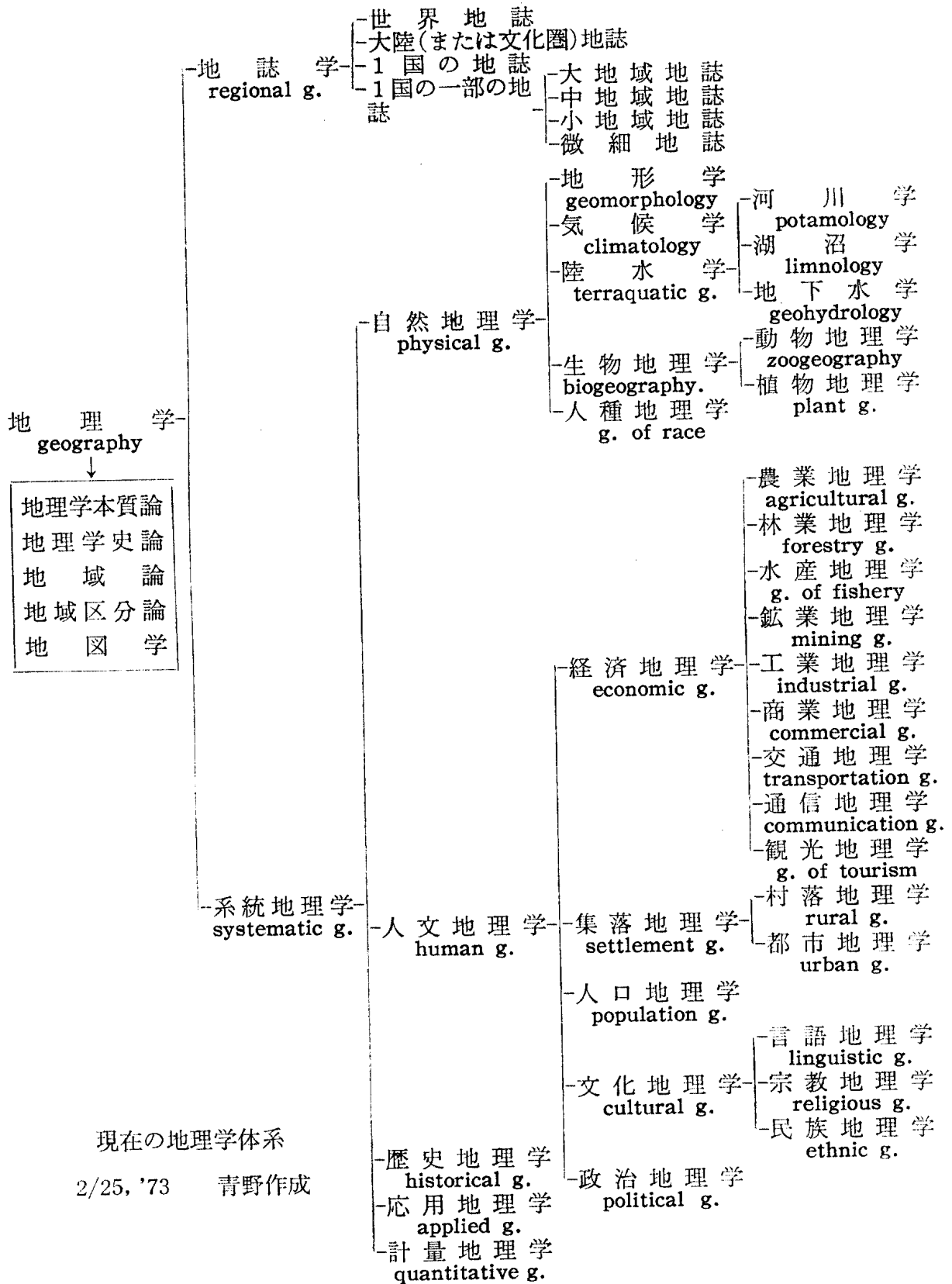
む す び

地理学と歴史学とは、それらを発展的に考察すれば、もと同根の研究であった。そして比較的最近まで続けられてきた。しかるに学問の独立が主張され、その専門化が進むにつれて微に入り細に穿つことを競って、現今では全く別の研究とされ、末端にいたっては両者の開きは少なからざる距離をもつにいたった。このことは多くの学問において、大同小異であるかもしれない。

しかしながら上に見てきたごとく、両者は学問的对象からいっても、その方法論から考えても極めて隣接しており、緊密に関係すべきものである。もしそうだとすれば、地理学と歴史学はゆくゆくは離れるべきでなく、むしろ相近づき、表裏一体の関係を回復すべきではなからうか。

しからばその手段はどうあるだろう。わたしは思うのであるが、両者の学がそれぞれ細分化された研究において、常にその本質を見失なわないことである、と。もっと押しつめていえば、いかなる末端においても、職人的であってはならないし、趣味として従事されてはならないということである。

注 (1)

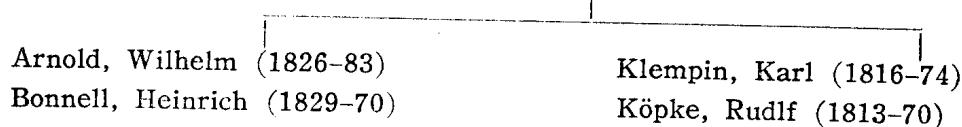


現在の地理学体系
2/25, '73 青野作成

- (2) 章学誠『文史通義』内篇
- (3) E. Bernheim, *Einleitung in die Geschichtswissenschaft*, Berlin, 1920, S. 1.
- (4) 頼久太郎『日本外史』
- (5) Herodotus, *The Histories*, A new Translation by Aubrey de Selincourt, The Penguin Classics 134, Edinburgh, 1954, pp. 40—1.
- (6) Julius Caesar, *Commentarii de Bello Gallico*, 近山金次邦訳『ガリア戦記』岩波文庫昭和17年がある。
- (7) Cornelii Taciti, *De Germania Liber*. 田中秀央, 泉井久之助共訳『ゲルマニア』刀江書店版, 昭和16年がある。
- (8) *Oeuvres Completes de Montesquieu*, Paris, 1907, Tom. 1 参照。
- (9) ヨーロッパ啓蒙期の作家の歴史叙述家としての位置づけは、わたしの特殊研究としての題目である。なかんずく Voltaire については、主として「文化史」の面から1972年度文部省助成による「文化史の研究とその概念規定」の1部であるために、『立正史学』次号に発表の予定である。Rousseau については拙著『ジャン・ジャック・ルソーの史学史的研究』(山川出版社, 昭和35年3月刊) 参照。Montesquieu については拙稿「モンテスキューの地人相関論に就いて」(西洋史研究5, 昭和9年8月) 参照。
- (10) 上掲拙稿参照。
- (11) 拙稿「ルソーとヘルダーの歴史的叙述について——第十八世紀後半歴史叙述の一斑——」(日本大学史学会研究彙報, 昭和41年12月) 参照。
- (12) Johann Gustav Droysen, *Grundriss der Historik*, Halle u. Saale, 1925, S. 25.
- (13) エピゴーネンの多いことは Marx の場合はとりわけ著しい。歴史家としては K. Kautsky (Th. More についてのものやフランス革命のものもあるが, Montgelas, Schücking との協同作業 *Die deutschen Dokumente zur Kriegsausbruch, Vollständige Sammlung der amtlichen Aktenstücke mit einigen Ergänzungen in Auftrage des Auswärtigen Amtes* が著名である。) F. Mähling, G. V. Plechanov などその数は少ない。しかも Marx の立場は総合的であり, 実践的であるために, その政治理論に歴史観を反映し, その点で極めて多数に上る。

Leopold von Ranke もその学派の多いことで知られている。次表は James Westfall Thompson, *A History of Historical Writing*, 1942, New York, Vol. II, pp. 190—1 掲載のもので Ranke 学派を極めて単純化した表である。

LEOPOLD RANKE (1795-1886)



(14)

Burckhardt, Jacob (1818-97)	Maximilian II (1811-64)
Carlson, Frederick Ferdinand (1811-87)	Mörner, Theodor (1817-74)
Cornelius, Karl Adolf (1819-1903)	Nitzsch, Karl Wn. (1818-80)
Delbrück, Rudolf (1817-1903)	Pauli, Reinhold (1823-82)
Dönniges, Franz Alexander (1814-72)	Roepell, Richard (1808-93)
Dove, Alfred (1844-1916)	Roscher, Wilhelm (1817-94)
Dümmler, Ernst Ludwig (1830-1902)	Schmidt, Adolf Wm. (1812-87)
Giesebrecht, Friedrich Wilhelm (1814-89)	Simson, Bernhard (1840-1915)
Gneist, Rudolf (1816-95)	Sybel, Heinrich (1817-95)
Herrmann, Ernst Adolf (1812-84)	Waitz, Georg (1813-86)
Hirsch, Siegfried (1816-60)	Wattenbach, Wilhelm (1819-97)
Jaffé, Philipp (1819-70)	Wilmans, Roger (1812-81)
Kampschulte, Friedrich (1831-72)	

WAITZ

Abel, Sigurg, (1837-73)	Meyer von Knonau, Gerold (1843-1920)
Arndt Wilhelm (1838-95)	Monod, Gabriel (1844-1912)
Bernheim, Ernst (1850-1922)	Pabst, Hermann (1842-70)
Bezold, Friedrich (1848-1928)	Pastor, Ludwig (1856-1928)
Brode, Reinhold (b. 1356)	Perlbach, Max (1848-1921)
Bruner, Heinrich (1840-1915)	Pflugk-Harttung, Julius (1848-1919)
Busson, Arnold (1844-92)	Posse' Otto (1847-1921)
Cardauns, Hermann (1847-1925)	Reuss, Rodolphe (1841-1924)
Creizenach, Wilhelm (1851-1919)	Rodenberg, Carl (1854-1927)
Damus, Rudolf (1849-1918)	Ropp, Goswin v. der (1850-1919)
Dehio, Georg (1850-1932)	Sattler, Karl (1850-1902)
Droysen, Gustav (1838-1908)	Schäfer, Dietrich (1845-1929)
Ehrenfeuchter, Ernst (1846-82)	Scheffer-Boichorst, Paul (1843-1901)
Ewald, Paul (1851-1888)	Schroeder, Richard (1838-1917)
Frensdorff, Ferdinand (1833-1931)	Schum, Wilhelm (1846-92)
Friedensburg, Ferdinand (1855-1930)	Schupfer, Francesco (1833-1925)
Grauert, Hermann (1850-1924)	Steindorff, Ernst (1839-95)
Handelmann, Heinrich (1827-91)	Stern, Alfred (1846-1936)
Harnack, Otto (1857-1914)	Ulmann, Heinrich (1841-1931)
Heller, Johannes (1851-76)	Usinger, Rudolf (1835-74)
Hildebrand, Hans (1842-1913)	Vischer, Wilhelm (1833-86)
Höhlbaum, Konstantin (1849-1904)	Vogel, Wilhelm (1838-91)
Holder-Egger, Oswald (1851-1912)	Wartmann, Hermann (1835-1929)
Hüffer, Hermann (1830-1905)	Weiland, Ludwig (1841-95)
Junghans, Wilhelm (1834-65)	Wenck, Karl Rabert (1854-1927)
Kaufmann, Georg Heinrich (1842-1930)	Winkelmann, Eduard (1838-96)
Kluckhohn, August (1832-93)	Wittich, Karl (1840-1916)

Koppmann, Karl (1839-1905)
 Leser, Emanuel (1849-1914)
 Libermann, Felix (1851-1925)

Wohlwill, Adolf (1843-1916)
 Zeumer, Karl (1849-1914)

SYBEL

Büding, Max (1828-1902)
 Erdmannsdörfer, Bernhard (1843-1901)
 Herbst, Friedrich (1825-82)
 Holst, Hermann (1841-1904)
 Kern, Theodor (1836-73)
 Lenz, Max (1850-1930)
 Maurenbrecher, Wilhelm (1838-1902)
 Noorden, Karl (1833-83)
 Varrentrapp, Eduard (1844-1911)
 Voigt, Georg (1827-91)
 Weech, Friedrich (1837-1905)
 Zeller, Eduard (1814-1908)

GIESEBRECHT

Francke, Kuno (1855-1930)
 Heigel, Karl Th. (1842-1915)
 Oefele, Edmund (1843-1902)
 Riezler, Sigmund (1843-1926)
 Simonsfeld, Heinrich (1852-1913)

CORNELIUS

Druffel, August (1841-91)
 Lossen, Max (1842-98)
 Ritter, Moriz (1840-1923)
 Stauffer, Albrecht (1860-1909)
 Stieve, Felix (1845-98)

DELBRÜCK

Harnack, Adolf (1851-1930)
 Lasson, Adolf (1832-1917)
 Sommerfeld, Wilhelm (1868-1915)
 Wolfstieg, August (1859-1922)

- (14) Haushofer は Karl Ritter や Friedrich Ratzel に負うところが多いが, Mackinder や Rudolf Kjellénからも少なからず影響されている。そして哲学者 G. W. F. Hegel や F. W. Nietzsche とのかかわりも重大である。歴史家としては H. V. Treitschke と関係があり, 軍略家 Clausewitz とのかかわりをもっていた。Weimar 共和国の末期 Adolf Hitler と近づき, Hitler の Lebensraum の説に影響があるといわれる。
- (15) 昨年朝日新聞紙上の「わが思索わが風土」に大塚久雄氏自身が書かれていたのを読まれた人は多かろう。大塚史学は大塚氏を中心とする一連の学者の学説である。その概要は拙著『日本西洋史学発達史』(昭和44年5月, 吉川弘文館) 第5章第1節で紹介しておいた。1950年の時期においてこの学説は最も進んだものであったが, わたしは「むろんこの史学派が, いつかまた崩れる日が来ないものでもあるまい」(p. 307) と述べたが, その後約20年批判は進みつつある。いま歴史学は自らの途を模索しているというべきである。
- (16) 「岡山史学」第25号(1972年12月発, 岡山史学会)「西洋近代史研究における最近の動向」など参照。

(16)

(17) Eduard Meyer, *Kleine Schriften*, Halle, 1910, S. 28.

(18) a. a. O., S.

(19) Tenney Frank, *Economic history of Rome*, Baltimore, 1927. なお彼には *Roman buildings of the republic, an attempt to date them from their materials*, Rome, 1924 などがある。

(20) 拙稿「J. J. Rousseau の歴史的思考について」(文学部論叢第35号 p. 17) 参照。

(21) 京都大学文学部史学科には「現代史」の講座が設けられているが、ここに所属学生の数か史学科のなかでは最も多い。わたしの専攻学生についても同じことがいえると思う。

(22) みすず書房『戦車と自由』(チェコスロバキア事件資料集)の標題をとった。1968年8月の事件をいう。

(23) 歴史学の上では連続と非連続がかなり重く考えられている。すなわち *Katastrophen Theorie* と *Kontinuitäts Theorie* とがある。古代と中世との連続、非連続の問題を中心として A. Dopsch や Henri Pirenne の論争や、中世と *Renaissance* に対する Burdach の考察などこれである。フランス革命が直接現代に糸を引いていると考えるものはないであろうが、研究の進展によって、関係ないと認められていたものが、思わぬところに関係をもっていることが発見される。ある事件がどこまで継続し、どこで断絶しているかを決定することは極めてむずかしい問題である。